

二〇一五年度九月例会 シンポジウム

女院と尼僧の信仰の軌跡―根津美術館蔵「春日若宮大般若経」をめぐる

【趣旨文】

根津美術館に蔵される「春日若宮大般若経」(二二一九〜二四二年書写)とそれを収める「春日厨子」については、これまでも歴史学や美術史学の立場からいくたびか言及されてきており、人文諸学の知見を結集して意義を見定める価値を有する宗教遺産である。本シンポジウムにおいては、経典と厨子を再調査する過程で明らかになったいくつかの知見に基づき、その意義を多面的・統合的に位置づけることを目指している。

この「春日若宮大般若経」は、尼僧浄阿の発願・書写になるものであるが、シンポジウムにおいては、伝存する五四一巻のうち五四〇巻は折本に改装)の書誌情報・奥書等を再確認し、経典の手跡についても専門的見地から分析を進める。仁治三年(二二四二)八月十三日、春日若宮宝前で「大般若経」第六百巻の書写を終えたことを記す願主浄阿の奥書に続いて、多くの廻向対象となる人々が筆録されるが、そこには八条女院・春華門院・宜秋門院や尼覚阿・尼真如など、女院と尼僧が数多く記されている。これらが願主浄阿の家系と密接に結びついた人々であることが確認され、それはあたかも女院と尼僧の結びつきによる春日信仰の軌跡を辿るかの感がある。廻向対象には浄阿の家系と人的紐帯に連なる貴顕・興福寺僧等も列挙されており、この「大般若経」全巻書写とその奉納を支えた背景を窺うことができる。

それらの実態と経緯については、奉納された「大般若経」を収める「春日厨子」と、その扉銘文(二二四三)および屋根裏銘文(二二四五)が、モノとことばによつて雄弁にものがたつている。シンポジウムにおいては、「春日若宮大般若経」と「春日厨子」の制作と、奉納後の転読の法会を支えた所領や人的紐帯の問題について、先学の指摘を踏まえながら、さらに時系列にそつた問題提起や、南都・天野山金剛寺の寺院史的視点、春日信仰史の側面等から議論を深めてみたい。

春日若宮大般若経および春日厨子 作品と研究史

白原由起子 根津美術館)

春日若宮社に奉納された大般若経および厨子は、明治の神仏分離の際、西大寺に移された。初代根津嘉一郎が五四〇帖の折本と厨子を入手したのは大正十五年だが、これに「廻向貴賤輩」を付した巻第六百が加えられたのは昭和四十年代である。黒漆塗りの経厨子は損傷が激しく、ほとんど展示されることがなかったが、近年本格的修理を行ったことで、本年三月より経巻とともに展覧している。今回の修理・展示作業の過程で、発表者は、各巻の状態を調査し、奥書を記録した。

これまで、本作品に関する言説は、作品の存在、また厨子に刻まれた銘文や巻第六百の廻向者名から読みとれる人の関係を、十三世紀の南都を中心とする社会的・宗教的ネットワークにおける一事例として扱うもので、この意味で本作品はきわめて幅広い研究分野の記述に登場する。すなわち、藤原季行の孫にして、北小路女房と六条局(法名覚阿)を伯母または叔母にもつ人的環境にあり、直接・間接的に八条院、春華門院、宜秋門院といった女院たちと関わりをもつこと、また覚阿から引継ぎ院主を務めた天野山金剛寺と春日若宮社との関係や、大般若経の長日転読のために寄進した椎木荘や伊予戸の水田についてだが、しかしその個々のテーマが深く論じられる段階には至っていない。

発表者の責務は、まず、文書であり美術品である本作品が語るものを詳述し、先学による指摘や様々な言説を机上に並べることにある。さらに今回初めて提示する巻末の墨書は、書写のペース、校合に携わった僧や使用した経典などの情報を含んでおり、写経の経緯や制作環境を考える際の資料となる。広く拡散した光を本作品に向けて照射することで、シンポジウムの議論に資するものとしたい。

「筆経としての「春日若宮大般若経」―尼浄阿の書風―

松原 茂 根津美術館)

書道史で取り上げる写経は、謹厳な楷書の奈良朝写経と、優雅な和様を示す平安時代後期の装飾経に偏る。その意味では、特別展「平安古経展」(二〇一五年四月・奈良国立博物館)が平安前期の遺品にも一章をもうけたことは画期的であったといえる。しかしながら、鎌倉時代以降の写経については、いまだ十分に光が当てられていないというのが現状である。寛喜元年(二二一九)から十三年かけて尼浄阿によつて発願・書写されたこの「春日若宮大般若経」も、厨子の刻銘や巻第六百巻末の歴名が多分野にわたる重要な史料として認められてはいるものの、写経の書そのものに関

する研究はほとんどない。まず、現存各巻の本文と奥書は浄阿のことば通り一筆であるのかを改めて確認することも必要であろう。

幸いなことに、根津美術館が所蔵する五百四十帖と巻第六百の二巻は、伝来の途次に巻頭や巻末を破損した巻もあるが、ほぼ全容をとどめているといつてよい。六百巻を一人で書写する一筆大般若経の遺品は数えるほどしかなく、ことに尼僧によるものは、他に例を知らない。奥書をたどることによって、浄阿は六百巻の大般若経を十三年間にどのように書写したのか、その実態を追うことが可能である。一人の人物の十数年間にわたる筆跡を追うことができるという例は、日記を除けばきわめて稀である。この間、浄阿の書風は必ずしも一定ではない。その揺らぎと変化の中に通底する浄阿の書の個性を抽出してみたい。

尼浄阿一筆書写大般若経の転読料所と安置空間

藤原重雄 東京大学史料編纂所

根津美術館所蔵の尼浄阿一筆書写大般若経・厨子は、モノそのものの存在感や情報量が豊かで、奥書交名・銘文を読み解き、人的関係からみた成立の背景が、他パネリストより報告される。本報告では、銘文に記された転読の実際と厨子が安置された場とを探ることを通じ、春日若宮社に対する法衆、ひいては中世春日社における仏事のなかで、若宮奉納大般若経の位置を考えてみたい。

寄進の願文には、浄阿没後に六口の供僧を置き、毎日三巻の転読を始行することが定められ、天井板裏の銘文には、寄進料所の坪付が詳しい。この遺言は実施されたのか。室町時代の尋尊『大乗院寺社雑事記』『箇院家抄』によると、大乗院門跡の支配する「天野供」として、「天野尼公」による寄進と若宮殿御廊における大般若経転読という趣旨は記憶され、その料所を把握し、供僧の補任も継続していた。あるべき姿を記し残す尋尊だが、一定の実態を伴っていたと理解できそうである。長祿二年（二四五八）の当知行分の注進に見える椎木荘の小地名も、天野供田の故地。大和郡山市（今国府町）に小字として残る。願文どおりに奉納され、指示に従い転読の励行が意識される、重みある仏事であった。扉の銘文という形態も奇与するところがあったろう。

春日若宮社の拝殿は、巫女の参仕する空間として芸能史でも知られているが、経所（御廊）という神前仏事の建物と一体をなしていた。この大般若経が安置され、転読が営まれた空間として最も可能性が高い。一方、大宮御廊には五部の大般若経が安置され、興福寺僧により転読が営まれ、新たな大般若経の書写校合にも用いられた。さらに社頭の諸屋でも大般若経の転読が行われ、四恩院では春日社法衆の性格が強い法会が営まれた。本経の位置づけを考える上で、視野に入れるべきことと思われる。

大般若経と春日若宮信仰―女院と尼僧の鎌倉仏教史―

近本謙介 筑波大学

根津美術館蔵「春日若宮大般若経」第六百巻には、仁治三年（二二四二）八月に春日若宮宝前で書写を終えた由を記す尼浄阿の奥書がある。この『大般若経』を納めた厨子扉銘文には寛元元年（二二四三）十月の願主比丘尼浄阿「奥書、同厨子屋根裏銘文には寛元元年十月および寛元三（二二四五）年九月の願主浄阿」奥書があり、この『大般若経』と厨子とは一具と見なされる。扉銘文には、始行「春日御社若宮長日転読大般若経事」として、浄阿による『大般若経』書写の経緯が、春日若宮で執り行うべき『大般若経』転読法会のための料所等とともに詳細に記され、また同厨子屋根裏銘文は、料所寄進状となっている。

『大般若経』の数巻には、興福寺四恩院本を書写した経緯を記す奥書があり、尼僧による經典書写と奉納の背後にある興福寺との関わりが窺われる。扉銘文には、貞応元年（二二二二）の春日社参詣の際の小児による『大般若経』書写を勧める霊夢に始まり、書写半ばにおける若宮瑞籬内で書写する経巻を黄衣神人二人が守護する霊夢など、春日神の靈験に基づく經典書写の背景が如実に示されている。春日若宮信仰を『大般若経』との関わりから見直し、それを興福寺との関わりから定位置していく必要がある。

また、『大般若経』第六百巻末に記される廻向対象を記す交名と、厨子扉および屋根裏銘に見える法会のための料所からは、尼僧による經典書写と施入を支えた女院をはじめとする人的紐帯がかなり詳細に明らかとなる。これを、女院と尼僧の営みとして、同時代の状況をも確認しながら見通していく作業を進めることとする。

浄阿の家系は天野山金剛寺との関わりを有しており、これを鎌倉時代初めにおける女院や尼僧とのあいだに結ばれた金剛寺を取り巻く環境と見なし、興福寺大乗院と金剛寺との密接なつながりへの展開の寺院史の中に見定めることも肝要であると考えている。